

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 8 日現在

機関番号：23702

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25870607

研究課題名(和文)「不登校」児・家族への包括的支援に関する研究：学校・家庭・地域関係機関の役割

研究課題名(英文) Comprehensive Support for "Futoko" Children and their Families: Role of School, Family, and Community-related Organizations

研究代表者

松本 訓枝 (Matsumoto, Kunie)

岐阜県立看護大学・看護学部・准教授(移行)

研究者番号：90448697

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：「不登校」児と家族にとって「不登校」がいかなる困難な問題状況、社会的な排除や孤立状況を招来しているかを家庭背景に着目し明らかにし、学校・家庭・地域関係機関の役割を追究することを試みた。結果、「不登校」のきっかけには主に人間関係のトラブルや課題があり、これらの課題を所有したまま「不登校」後を過ごす姿があった。また、家族が「不登校」児に過剰な配慮で関わりながら、低学力や家庭の経済的困難から「不登校」後の進路を描けない、進学を断念せざるを得ないという問題を背負いつつ今の自分を変えるべく試行錯誤している彼らの姿もあった。

現在、これらの結果から学校・家庭・地域関係機関が果たす役割について検討している。

研究成果の概要(英文)：This study aims at clarifying how "Futoko" causes difficult and problematic conditions, social exclusion, and isolation with the perspective of family background for "Futoko" children and their families. And based on these result, this study examines the roles played by the school, family, and community-related organization. The results indicated that "Futoko" is prompted primarily by problems and issues related to the personal relationships. And, "Futoko" children spent the post "Futoko" with owning these problems. Furthermore, it showed that families intervene with excessive concern for "Futoko" children. Also, it is clear that "Futoko" children face some problems for being unable to imagine their post Futoko course and being forced to give up pursuing higher education, because of poor academic ability, their families' economic difficulties. They struggled to change themselves.

研究分野：教育社会学

キーワード：「不登校」問題 「不登校」児・家族 「不登校」支援

1. 研究開始当初の背景

ニート・フリーター問題、ひきこもり問題として語られる若者問題の背景には、グローバル化による非正規雇用の増大などの社会構造の変動と、こうした中で人々が経験するリスクに対して既存のセーフティネットが機能せず、自己責任として様々な被害や危険を個人が引き受けていくという「リスクの個人化」の過程が大きく関与している。とりわけひきこもりの若者達の中には「不登校」を経験している者が約 30% (厚生労働省,2003) にも上っている。また、「不登校」であったことが、その後の進学(「不登校」児の高校進学率は 65.3%、同年の全体では 96.5%、「不登校」児の高校中退率は 37.9%、同年の全体では 2.0%) や就職といった進路形成に大きな影響を及ぼし、不利益やマイナスを生じさせている事実(森田,2003)があり、義務教育段階での「不登校」支援が急務である。

申請者は、母親・父親への聞き取り調査から「不登校」問題とは母親・父親達にとって母親役割・父親役割を剥奪された問題として生起すること(松本,2003;松本,2005)や「不登校」児親の会の役割(松本,2008)を明らかにしてきたが、今日では以下にみるように「不登校」タイプの多様化と家族の「リスクの個人化」という新たな動向が出現している。

現在、従来の神経症型「不登校」、遊び・非行型の「不登校」に加えて、発達障害や児童虐待を背景にした「不登校」など「不登校」タイプは多様化し(伊藤,2009) 家庭の教育力の問題から「不登校」状態となる子ども達の存在(西原,2006)も明らかにされ始め、「不登校」児の家庭背景に着目してその実態を把握することが求められる。様々な被害や危険を個人が引き受けていく「リスクの個人化」の過程は個々の家族にも波及し、学校に行けない/行かないことをめぐって家族(保護者)の多くは自助努力での対処を余儀なくされ、「不登校」児家族(保護者)の対処能力「不登校」対処に関わる情報や経済力、ネットワーク資源などが「不登校」児の立ち上がりに影響することが想定される。「リスクの個人化」した社会において、家族(保護者)の「不登校」への対処能力などの家庭背景がどのようなものであるかを質的調査から明らかにし、必要な支援策を講じていくことが喫緊の課題である。

2. 研究の目的

「不登校」児と家族(保護者)にとって、「不登校」であったことがどのような困難な問題状況をもたらしているか、社会的な排除や孤立状況をもたらしているかを家庭背景に着目して明らかにする。そして、「不登校」

児・家族(保護者)への包括的支援体制を構築するために学校・家庭・地域関係機関の役割を追究する。

3. 研究の方法

本研究は、以下の2つの方法により実施した。

(1) 「不登校」経験者・家族(保護者)対象の聞き取り調査

「不登校」児と家族(保護者)にとって、「不登校」であったことがどのような困難な問題状況、社会的な排除や孤立状況をもたらしているかを明らかにするために、「不登校」経験者(成人)と保護者を対象に聞き取り調査を実施する。

(2) 「不登校」支援を先進的に実施している機関・団体・施設関係者対象の聞き取り調査

「不登校」児・家族(保護者)への包括的支援体制構築に向けて学校・家庭・地域関係機関の役割を明らかにするために、「不登校」支援を先進的に実施している機関・団体・施設関係者対象に聞き取り調査を実施する。

上記(1)と(2)の調査で得られたデータの分析では、(1)の結果を「不登校」経験者と家族(保護者)の「不登校」によって生じた困難や課題に類型化し、(2)の結果の「不登校」支援の現状と課題に関する内容を踏まえて、「不登校」によって生じた困難や課題ごとに、学校・家庭・地域関係機関に求められる役割を検討する。

4. 研究成果

(1) 「不登校」経験者対象の聞き取り調査

「不登校」経験者(成人女性)5名を対象に聞き取り調査を実施した。

「不登校」のきっかけには、いじめなどの人間関係上のトラブルや進学などで新たな環境に入ることによる居場所や自信の喪失などがあり、これらの人間関係上の困難や課題を所有しながら、彼女らは「不登校」後を過ごしていた。そこには、人間への不信感を払拭できない姿、いじめ体験のフラッシュバックによりメンタル面への打撃を受けることによる働くことへの自信を喪失した姿、消極的な人間関係をとる姿があった。平成18年度不登校生徒対象の追跡調査結果(不登校生徒に関する追跡調査研究会,2014)によれば、「不登校」のきっかけに「友人との関係(いやがらせやいじめ、けんかなど)」が52.9%と最も高い割合を示しており、それは男子43.4%に比べて、とりわけ女子は60.9%と高率で男女差が大きく、本研究においてもこれらの結果と一致する傾向がみられた。また、先述の平成18年度不登校生徒対象の追跡調査(不登校生徒に関する追跡調査研究会,2014)において、「不登校」による苦労や不安には、「他人との関わりで不安を感じるがあった」が「おおいにあった」(42.6%)

「少しあった」(30.9%)を合わせて73.5%と高い割合を示しており、これら「不登校」後の人間関係上の困難や課題の存在は本研究の結果とも一致し、「不登校」によりこうした問題や課題がより顕在化したと考えられる。「不登校」のきっかけである人間関係上の困難が、「不登校」後の歩みにとってなんらかの足かせとなっていることがうかがえる。このことは、「不登校」後の歩みを進路形成の面から支援すること(不登校問題に関する調査協力者会議,2003)に留まらず、人間関係上の課題をいかに克服するかという面からの支援を講じることの必要性を示唆していると思われる。

そして、この人間関係上の課題の克服という面から彼女らの「不登校」後をみた時に、友人や教師、恋人、職場の人間関係で自らが受け容れられる経験や、自己表出する経験、「不登校」当時の自身を相対化する機会が、人間不信を払拭し、居場所の取り戻しへと繋がっていた。そこには、「不登校」後を前向きに歩もうとする姿があり、場合によっては「不登校」を経験したからこそ得られたこと、例えば多くの時間を読書に費やすことによって得られた多面的な思考や揺るぎない私といった人格をもって今を生きる意識・態度の中に「不登校」を肯定的に捉えようとするアイデンティティ形成の萌芽がみられた。ただし、ここで言う「不登校」後を前向きに歩むとは、「不登校」によって顕在化する困難や課題が克服されたことを意味するのではなく、協調性の不足や周囲のまなざしを過剰に意識するといった人間関係上の悩みや、学校に行かなかったことによる低学力の問題と進路選択の狭まりなどの悩みを抱えつつも、「不登校」後を試行錯誤しながら歩む、歩もうとする彼女らの姿を意味している。

「不登校」という経験は、折に触れこうした問題や課題を突きつけるのであり、彼女らは「不登校」後を「不登校」経験とともにあると言っても過言ではない。

(2)「不登校」経験者家族(保護者)対象の聞き取り調査

「不登校」児をもった経験のある母親6名を対象に聞き取り調査を実施した。

わが子(男性2名、女性4名)の「不登校」により、母親はこれまでの親子関係あるいは夫婦関係、舅姑との関係を反省的に顧みながら、「不登校」の子ども中心の親子関係を構築し、「不登校」児に対して過剰な配慮をもって母親のみならず、その他の家族員(父親、祖父母、きょうだい)が関わっていた。

「不登校」児の「不登校」後の歩みでは、(1)の結果と同様に「不登校」児を受容し、支えとなる家族や家族外理解者(教師や友人など)の存在、自己表出する経験などが、「不登校」児が「不登校」後を前向きに歩もうとする姿勢に繋がっていた。しかしその一方で、自らの描く進路と自身の学力レベルとの齟齬やいじめ被害により人間関係を取り持つ

ことができず、本人なりに努力はしつつも思うように進まないケースもみられた。彼/彼女らは、低学力の問題や人間関係上の困難、家庭の経済的困難から、「不登校」後の進路を描くことができない、進学を断念せざるを得ないといった問題を背負いながら、今の自分を変えるべく試行錯誤していた。

なお、本研究期間に申請者がこれまで行ってきた「不登校」児親の会に参加する母親/父親を対象にした一連の研究知見をもとに、「不登校」問題に対して果たす親役割を検討した。その結果、母親/父親たちは、子どもの意思を尊重することを中心に子どもを守る母親/父親となり、子ども中心の夫婦関係となることが見出された。子育てを家族の責任、親の責任とする言説のもとで、子どもに寄り添い、子どもを守るという親役割が強固となり、家庭内はより子ども中心の関係へと移行する。親が変わること、親が家族関係を変えることが求められる。保護すべき子どもを中心に家族関係を変容させていく親の会の対処には、依然として子どもに関することを家族の責任に委ねる現代社会の問題が映し出されていると言えよう。

なお、現在これら(1)と(2)の結果をもとに、学校・家庭・地域関係機関が果たす役割について、「不登校」支援を先進的に実施している4つの関係機関・団体・施設関係者対象の聞き取り調査結果を踏まえて検討している段階である。

【註】

1) 本研究では、「不登校」とは「不登校」児、その周囲の者がどの過程で何を問題とするかという主観的判断によって規定される生じる問題であるとする立場に依拠する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

松本訓枝「母親/父親たちの家族再構築の試み
不登校児親の会の現場から」『青少年問題』61,査読無,pp.48-53,2014.

〔学会発表〕(計 1 件)

松本訓枝「<不登校>問題における家族役割とその限界 <不登校>児親の会参加者の家族変容過程からの検討」日本生活指導学会 回大会,和歌山大学,2013年9月8日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名/称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松本 訓枝 (Matsumoto, Kunie)
岐阜県立看護大学・看護学部・准教授
研究者番号：90448697

(2) 研究協力者